

原子力村

第3部 生い立ち

□1□

東海村は一九五五年三月、黄門とエネルギー」だつた。旧石神村、旧村松村の合併で産声を上げた。

それから四十年後の九五二年二月二十八日、村内の東海文化センターで村発足四十周年を祝う記念式典が開かれた。あいさつに立った須藤雄雄村長(当時)は、

式辞の中で「東海村は日本の原子力平和利用発祥の地として今日を迎え、東海村の歴史は日本の原子力平和利用の歴史といっても過言ではないと存じます」と述べた。

所敷地の面積を合わせると、村の総面積の約一三・四％にも達する。「村の中心でウランの加工、燃料の製造から発電事業、使用済燃料の処理、廃棄物の管理まで一連の核燃料サイクルを賄うことができた(関係者)ともいわれる。

東海村は豊かな街として知られる。住民一人当たりの平均所得は四百五十万円。県平均の三百四十万円に比べて、約一・四倍に達している。

発祥の地

(九七年度)。自治体の独自財源の強弱を表す財政力指数は一・五で、神栖町に次いで県内二位、三位鹿嶋市の一・〇四を大きく引き離す(同)。

人口は約三万三千人。村は八一年七月、米國アイダホフォールズ市と姉妹都市の盟約を結んだ。国際姉妹都市の調印は県内では水戸市に次ぎ二番目。アイダホフォールズ市は米國の原子力開発の中心地。研究者の交流が姉妹都市の機縁になった。

その村で昨年九月三十

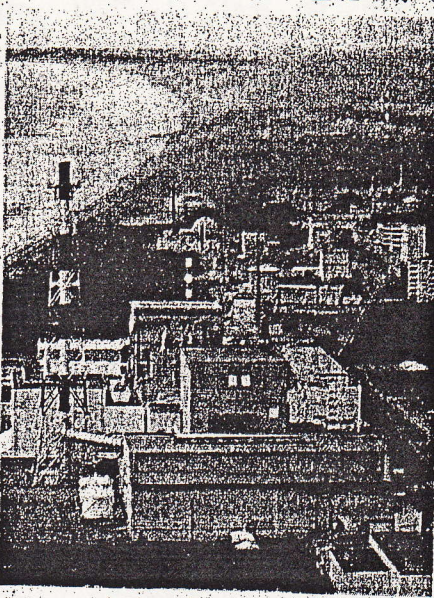
村議会は三連(当時)でチェルノブイリ原発事故があった直後の八六年七月、「核兵器廃絶」とともに「原子力平和利用推進」宣言を全会一致で議決した。

村は八一年七月、米國アイダホフォールズ市と姉妹都市の盟約を結んだ。国際姉妹都市の調印は県内では水戸市に次ぎ二番目。アイダホフォールズ市は米國の原子力開発の中心地。研究者の交流が姉妹都市の機縁になった。

村民憲章に「原子の火」

日、未曾有(みぞこ)の原子力災害が起きた。JCOの街「東海村」と掲げてあった常設案内板から「原子力の街」の文字を撤去した。住民から「看板を

見ると不安になる」との声が役場に寄せられたのが理由という。間もなく、この村の突然の撤去措置に対し、住民の間からは戸惑いや反発の声が上がった。「役場が独断で原子力の看板降ろしをするのは許せない」との声も聞かれた。一つは市が研究遂げたのか。



大型の原子力施設が林立する東海村・村松海岸

第3部 生い立ち

東海村が「原子力の街」たる研究所の立地場所の検討に乗り出す。検討の対象と

だが、実はこの間、国の原子力委員会はいったん

射撃爆場（ひたなか市と東海村にまたがる現在のひたなかに開発地区）。当初案に「東海村」の文字は見あたらない。いわば、原研地の十分な用水の確保のための東海村への立地は、選考の過程で急浮上し、原子力委員会の決定を覆しての逆転劇で決まったことになった。

補地の一つとして浮上するのは五六年一月半は、原研は立地の条件として②東京に近い③広大な敷地④国有用の手配の中で、「射爆場の返還という点も相当困難な問題である」というように判断した程度で、その大は足元間もない東海村の村

友木洋治知事（当時）も「当時はまだ射爆場がすぐに日本に返還になるとはだれも考えられませんでした。」しかし、村長は『原研』本紙——9556年4月7日付

付

1956年 急転の原研立地劇 I

友木洋治知事（当時）も後年の手記の中で、「射爆場の返還である」というように困難な問題であるとも言うように判断した程度で、その当時は敷地問題について大した関心は持ってませんでした」（『原力力開発十年史』より）、当時の心境は、接の村松の国有林（現在

なぜ、わが国最初の原子力施設が東海村に立地されることになったのか。とになっている。

とになっている。

用地の検討開始から決定

までわずか約四カ月。前東

海村長 須藤富雄さん(土)

に當時、農業に従事して

はあれよあれよといふ間に

できたような感じがしま

す」と振り返る。

1

100

10

は、原研の立地場所を神奈川県横須賀市の武山（たけやま）地区に決定している。しかも当初、国が本県の候補地として名前を挙げていたのは、「水戸市郊外」と表記された米軍水戸

すべては、初代東海村長、川崎義彦氏のひらめきから始まった。

射撃撃場が含まれ、本紙も同二十日付で二報を伝えている。

しかし、これに対する地元の受け止め方はやや冷ややかだっただけらしい。候補地とされた射撃場は米軍が現

を振り返っている。

ただ、このニュースに敏感に反応した人がいた。川崎村長だ。

役場職員として村長の秘書役だった現東海村議、須藤浩三さん（左）は語る。

地)なら誘致できるのではないか」と思い立ち、早速、友末知事のもとへ進言に行ったわけです。

当時は村発足後初の村議選の真っ最中。村長の独断行動だったらしい。

しかし、進言に県庁を訪ねるが、知事はあいにく不在。秘書課長に伝言を託した。ただ、しばらくはそれきり、県サイドからは何の

反応も返ってこなかったといふ。

実験動力所を設置
 早急に大正克服要道
 東海村に正式決定

「原子力村」

第3部 生い立ち

□3□

日本原子力研究所（原研）の立地候補地として、百六十五秒の二カ所とさ

何とか視察に間に合わせま

1956年 急転の原研立地劇Ⅱ

「視察団が来県するとい

ところが、原子力委員会

（現・ひたちなか市馬渡約

で友末知事の秘書役だった

横須賀決定に異論噴出

バスに張り、誘致に熱を

の武山立地を決定すると、

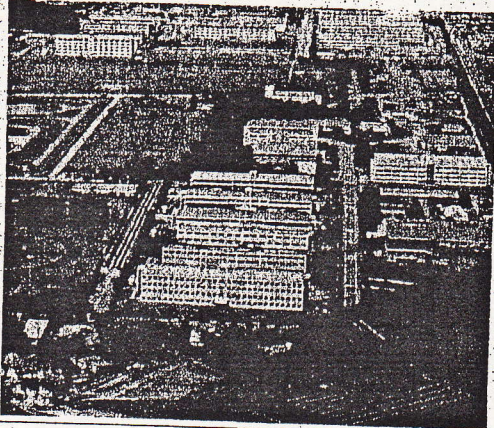
ただ、現地視察は神奈川

この経緯はなすが、友

その読み通り、原子力委

として利用する意向を主張

視するのは許されない」な



原子力村

第3部 生い立ち

□4□

日本原子力研究所(原研)の立地問題は一九五六

年春、約一カ月間にわたって

暗礁に乗り上げる。原子力

委員会(委員長・正力松太郎

国務大臣)の「横須賀」

市武山(たけやま)地区」

はここに始まる。

の決定に対し、政府部内か

ら異論が噴出。収拾の見通

しがつかなくなったため

原子力委員は、学者や有識

者らを含む委員五人で構成

する原子力行政の最高意思

決定機関。「自主・民主・

で、武山立地を主張し続け

た正力大臣も最終的に断念

の意向を固め、政府は四月

六日、武山放棄を正式決

定。これを受け、原子力委

義務付けられている。

原研の武山への立地決定

は、原子力委の最初の決定

委員会設定の趣旨からも、

川崎義彦東海村長のひら

きや日時を要するであ

る。…(中略)…原子力

地とされることになった

急転直下、東海村村松に立

場からは多少の欠点が

認められ、また施設の完備

にはやや日時を要するであ

る。…(中略)…原子力

地とされることになった

急転直下、東海村村松に立

場からは多少の欠点が

認められ、また施設の完備

にはやや日時を要するであ

る。…(中略)…原子力

地とされることになった

急転直下、東海村村松に立

場からは多少の欠点が

認められ、また施設の完備

にはやや日時を要するであ

る。…(中略)…原子力

地とされることになった

急転直下、東海村村松に立

場からは多少の欠点が

認められ、また施設の完備

にはやや日時を要するであ

る。…(中略)…原子力

地とされることになった

急転直下、東海村村松に立

場からは多少の欠点が

1956年 急転の原研立地劇Ⅲ

政府介入、一転東海へ

事項でもあった。東海村への立地を決めた

委員会決定文の後半には「

委員らの露骨な不快感が表

明されている。

『きようはあらためて東

の森一久さん』は「原子

力委は今後も委員会の決定

を尊重されるよう希望す

る。一連の逆転劇について、

日付の本紙掲載の村長談話

は「本村に正式決定したの

たの反発や風当たりも並

みではなかった。

樋口隆吉東京大学教授

政

海村を選んだが、これは地

域が広く、一カ所で研究し

うる利点がある。他面この

地は交通が不便で、研究者

の立場からは多少の欠点が

認められ、また施設の完備

にはやや日時を要するであ

る。…(中略)…原子力

地とされることになった

急転直下、東海村村松に立

場からは多少の欠点が

認められ、また施設の完備

にはやや日時を要するであ

る。…(中略)…原子力

地とされることになった

急転直下、東海村村松に立

場からは多少の欠点が

認められ、また施設の完備

にはやや日時を要するであ

る。…(中略)…原子力

地とされることになった

急転直下、東海村村松に立

場からは多少の欠点が

認められ、また施設の完備

にはやや日時を要するであ

る。…(中略)…原子力

地とされることになった

急転直下、東海村村松に立

場からは多少の欠点が

認められ、また施設の完備

て、準備体制を整え、中

央、地元の三者一体の

空で事業計画の実行推進を

はかりたい」と淡々として

おり、自身が発案者となっ

た事情には一切触れていな

い。他方、東海村は当時、東

京からはるか離れた無名の

寒村。原子力委の決定文に

もあるように交通アクセス

は横須賀市武山に比べて比

較にならないほど悪かつ

た。内務省構想はついに実現

動き出した。ただ、決定翌

このため、東海村への逆

転立地に対する中央の学者

研の計画は半年は遅れ、研

究も不便になる

樋口隆吉東京大学教授

政

府が水戸と決めるなら、東

京―水戸間に高速道路をつ

くるとか、研究所専用の大

型ヘリコプターを持つとか

の便宜を図ってもらいたい

談話の中でも、原研の立

地問題は依然として「水

戸」。東海村は文字通りの

無名だった。



第3部 生い立ち

□ 5 □

藤浩三さん七五は「正力大臣は初めから東海の立地へ

1956 年 急転の原研立地劇Ⅳ

について、友未知事は後年「全国各地で誘致運動があったのは聞いていたが、運動はなすべきでないとの強い信念をもって終る。ただ、友未知事は広島市の出身。原爆投下時には妻子を同市内に疎開させてお

[illegible]

絡み合う旧内務省人脈

に、当時の本紙報道では、立地問題が暗礁に乗り上げて以降、正力大臣は「武山がためなら、東海だ」と繰り返し発言している。

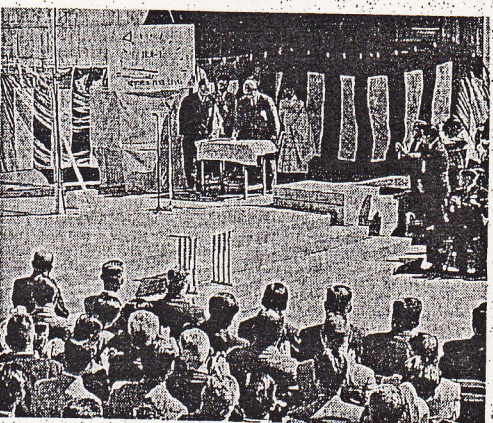
元県職員で友末洋治知事

「は正力、友木両氏と商榷を統合した最強官庁。正力、工務局長の竹内勇之助、炭田氏や中曽根氏、橋本清之助、城交通会長（当時）、滝原産業事務局長（元内務大臣、幕閣の父）」として知られ、戦後の原子力開発をリードした顔役は、正力自身は知らず、確かな正力さんと竹内さんが旧知のす。内務官俣は戦後、復お任せし、万一決まらなう、反対運動が起らない、さまたげを人脈と人間関係で潰した。二人は旧制興へ互いに力を合わせよう、反対運動が起らない、さまたげを人脈と人間関係で潰した。二人は旧制興へ互いに力を合わせよう、反対運動が起らない、さまたげを人脈と人間関係で潰した。

も絡まりあっていったよう
だ。

横須賀市武山地区は原研
東海研究所にわが国初の原
子の火が灯った翌年（五八
年）、米軍からの返還が実
現。自衛隊基地に衣替え

し、今日を迎えている。地元住民でも、かつて原子力施設を立地する動きがあったことを知る人は少ないという。



原子力村

第3部 生い立ち

□6□

日本原子力研究所(原研)の立地場所として突如、わが村の名前が浮上した住民たちは当時、それをどう受け止めたのか。

「今思えば、不思議なくらい村内では反対の声は耳にしなかったですね。当時村議だった豊島勝一さん

「東海村は前年に合併で誕生したばかりで、ムキとサツマイモくらいしか取れない小さな村。これから、施設の受け入れにも住民の間にはほとんど抵抗はなかったと振り返る。

原研の立地候補地として突如、東海村の名前が新聞に載った一九五六年一月は、村発足後の村議選の

原子力がやってきた

め方はやや温度差がみられる。民間組織でもあった。「青年団の中からも原子力誘致の可否を勉強しよう」という声もあるにはありませんが、住民のほとんどは「わかれ関せず」という感じだったと思います」と語るのは、東海村村長の豊島勝一さんだ。

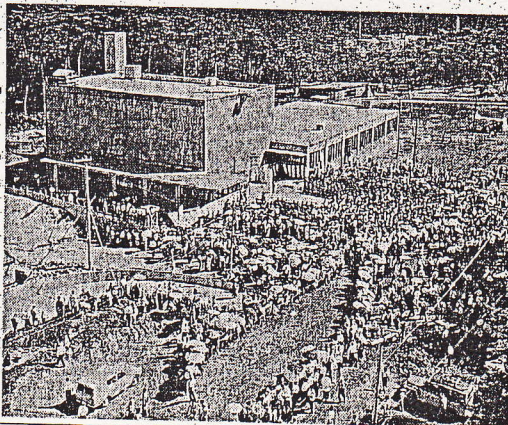
■1956年当時の村民世論調査

- 原研のできることをどう思うか
- 賛成=34.8%
 - 決まってしまったから仕方ない=32.1%
 - 反対=12.9%
 - どちらでもよい=11.8%
 - わからない=8.4%
- 放射能、その他危険はあると思うか
- 全然ないと思う=4.0%
 - 少しあると思う=53.2%
 - あると思う=20.4%
 - 分からない=21.9%
- 立地で暮らしはどうなると思うか
- よくなると思う=22.3%
 - 大して変わらないと思う=44.7%
 - 悪くなると思う=11.7%
 - 分からない=21.3%

急展開で住民論議なし

同僚議員と中曽根康弘代議士(当時・衆参両院の原子力合同委員長)らのものを陳情に訪ね歩いたという。一般住民レベルの受け止

原研東海研究所の原子炉(JRR-1)の火入れ式に集まる人々



設の受け入れに反対の動きは見られなかったものの、いや不安を覚えていたことの結果をみると、相当数をうかがわせる。

「原子力村」

第3部 生い立ち

□7□

日本原子力研究所の受け入れをめぐって、当時、住民の間に論議がなかったのは、それが文字通りわが国の施設で、原子力に関する情報が絶対的に不足していた事情もある。

原研の村内立地を前に、当時村職員だった須藤浩三さん（左）は各地で住民説明会を開いたが、会場で説明用に使った広報映画は米

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「原子力の危険性について」

「科学の英知信じよう」

原子力がやってきたⅡ

「砂防林事業で実際に植

建設に複雑な思いを隠せな

育ってきた松林が次々に

き倒され、矢継ぎ早に進む

業の影響を無視できない、

入れたのも、この砂防林事

すなり原子力施設を受け

た。住民の中には長年大切

に育ってきた松林が次々に

き倒され、矢継ぎ早に進む

業の影響を無視できない、

入れたのも、この砂防林事

すなり原子力施設を受け

た。住民の中には長年大切

に育ってきた松林が次々に

作詞した後のテレビアニメの主題歌には「ラララ 科学の子」というフレーズも出てくる。

「第三の火、世界を開く

未来エネルギー」という言葉

と大島

東海村の住民にもともと

と国家プロジェクトを受け

入れる素地があった、との

藤さん。住民心理の背景を

しきりに「ぼす」

「ぼす」

「ぼす」

「ぼす」

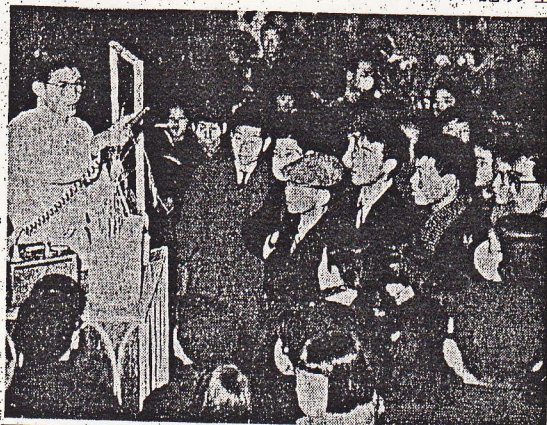
「ぼす」

「ぼす」

「ぼす」

「ぼす」

「ぼす」



原研の開設に併せて、1957年1月1日から2月5日まで開催された「原子力平和利用茨城博覧会」水戸市堀原総合体育館

原子力についてほとんど得力があつた、といふ。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

「東海村に原研が立地

さん。

第3部 生い立ち

8

「クルマが何台も連な

て走ったので、道路脇にも
うもった草がはじり、迎ま
れ、真つ白でひた。村で
唯の三輪自動車のポンプ
車をもつ消防団が繰出で散
水をしたがね」

58年

二号炉
JRR-2119

道6号も含めて舗装道路は、村内には五六年当時、国、浜口さんが東海村に移り住んだのは五八年。原研敷

東海村は当時、一面にイ 宅の荒谷台住宅だった。
 千や陸稻の畑ばかりが広が 荒谷台住宅は現在、周辺

イモ畑

相次ぐ施設、科学者続々

たのは、大学の指導教官に信をかけたれた助手や、学院の生たちで中心た。原研OBの元北見工科大学、浜田和さん（主教授）、北道大学大学院に在学した教授の薦め、入所した。学したり。そんな時代で、当時の模様がよく覚えてい

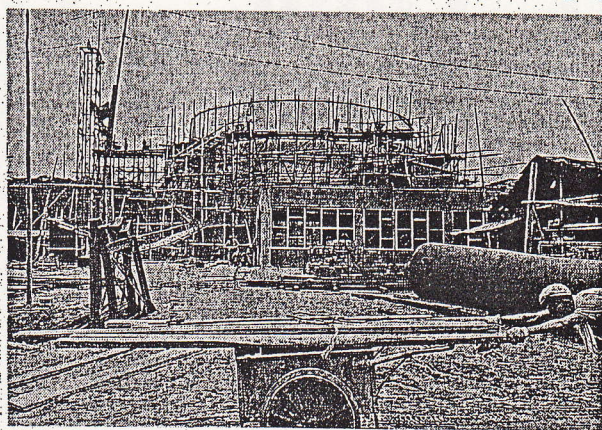
れまてね。もちろん、当時は原子力はだれも触ったことのない未知の分野。初務大臣ら一行が初めて現地視察に訪れた。村職員も、その対応にあたった現には草急ぎ止まらない。

六年四月十九日、初代原子力委員会長の正力松太郎国務大臣ら一行が初めて現地関車の時代で、村の玄関口である石神駅（現東海駅）に到着。常磐線も電化にスパーや銀行が立ち並ぶ村中心街の一角になっているが、浜口さんは「あのころは自毛からでも

る純農村。常磐線も電化にスパーや銀行が立ち並ぶ村中心街の一角になっているが、浜口さんは「あのころは自毛からでも

店といえは、集落（こ）にきました。周りは一面の畑だったわけですから、真新

しいアパートはとにかく目
立ちましたね」と振り返っ
た。



「原子力村」

第3部 生い立ち

□9□

「文化果つてくると来 社員生活の便宜のために てしまった」。原子力開 運した。日中の社宅から 発の黎明(れいめい)期 週一、二回、社員を妻ら 東海村に集った研究者の間 乗せ、水戸市内のデパート にはそんな思いにさいなま との間を往復した。

「村には肉屋、魚屋、ハ の食料品や日用品のほとん 百屋もなかった」。地元住 どの週一、二回の水戸への 民で、当時村だった豊島 買出しで賄っていたはず 勝一さん宅は、原子力施 設が立地し始めた一九五〇 年代後半の村の様子を振り 返る。

そんな当時の暮らしが 象徴的に物語るのが「買 物バス」だ。日本原子力 研究所(原研)や日本原子 燃料公社(現・核燃料機構) 日本原子力発電(原電)が 一軒きり。ぶらりと立ち寄

設もある。昨年のJCO臨

界事故で、大量の放射線 を浴びた作業員三人がヘリコ プターで搬送された科技庁 放射線医学研究所(放医 研)だ。

放医研は五六年当時の計 画では現在の核燃料機構敷 地に整備される予定だった が、翌五七年には千葉市へ 放医研のような高度専門

「モ畑」につち音

こうした民間企業にとつ ても、東海村は事業所を立 ち上げるには最も魅力的な 地であった。事業開発を展 開していく上で原研、原燃 公社など国の研究機関周辺 に立地していれば、将来的 に情報交流など多様なメリ ットを見込めるためだ。地 元には原子力施設を受け入 れる下地ができており、住 民とあつれきが生じる恐れ

民間も進出、変わる寒村

敷地を変更した。

敷地を変更した。 表向きは原燃公社の将来 的な敷地拡張構想や、周囲 的に原子力施設があると微量

な放射線を扱う研究の支障 になりかねないというのが、 表向きの変更理由だが、村

に、放医研の医師や技師 出そうとしていた。

病院の地元整備について、

県は臨界事故後、あつた 表向きは原燃公社の将来

的な敷地拡張構想や、周囲 的に原子力施設があると微量

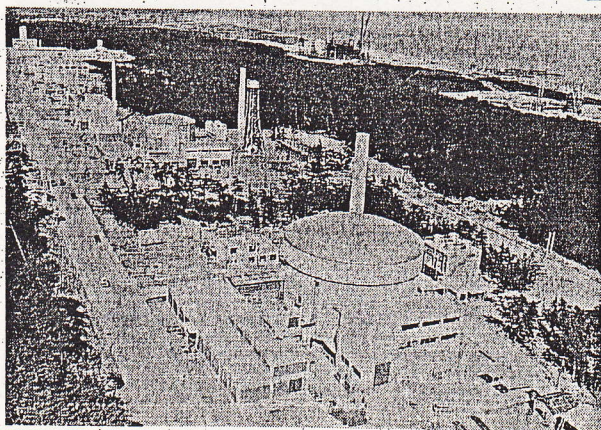
な放射線を扱う研究の支障 になりかねないというのが、 表向きの変更理由だが、村

定に入った。JCOが石神 地区に立地しているのも、

事業所が建設されたのはそ ころだった。地元の動きに呼 応して村内の沿岸部。一当

し、住友グループが六〇年 現在地を確保したため

センターが形成された経緯に について「まず国の機関が先 行的に立地することによつ



がみられる」と指摘してい る。

原子力村

□10□

第3部 生い立ち

東海村の役場近くには、
原研東海研究所の正門と国
道6号を結ぶ直線道路が通
っている。通称「原研通」
。一九五六年の原研の
立地決定後、県が真っ先に
手がけたのがこの道路づく
りだった。

長は県に対し、当初道幅を
三十メートルにするよう要望し
た、と伝えられる。
それから六、七年後、
原子力施設近隣の住民の間
には「いずれ自宅の立ち退
きを迫られることになるら
しい」との不安な風評が広
がった。

日本最初の原子力施設の
立地に伴い、万一の事態に
備えた「退避道路」として、
東海村内に原研、原燃公
社、原電などの立地が相次
いで決まると、村の将来像
がまた幅六メートルの砂利道だ
った時代で、一面の畑の中
に延びる幅十一メートルの舗装道
は単に村だけの問題ではな
く、国に訴えられた。わが国最初
の原子力施設の集中地帯。
国レベルでも、万一の事態
に備え、当時の川崎義彦村
を想定した原子力都市にあ
るべき、と主張した。

事故想定し人口抑制案

幻の都市構想

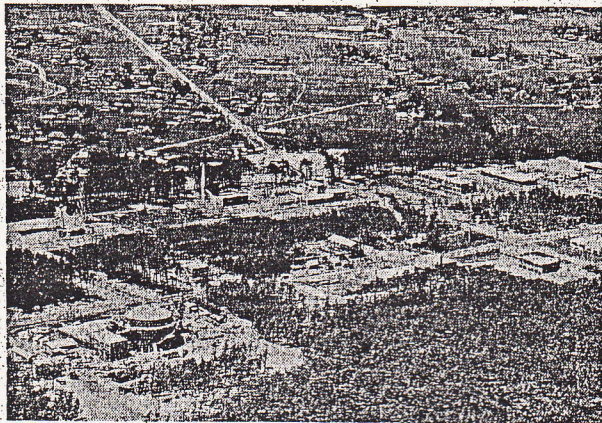
東海村地区の地帯整備は、
的は街づくりの在り方につ
いて本格的な研究に乗り出
す。専門部会では、まず人口
分布小委員会で大規模な原
子力事故の発生を想定した
村周辺の人口分布の在り方
や問題を洗い出し、その
ための適正な都市計画につ
いて、以下の地区には規模の大
きい人口集中地区が存在し
ないようにする。

○施設から六キロ以上の周
辺地区は人口の増加が正常
に推移するようとする。
○客申は「従って原子力
校になっている。明治三十
八年創立の村松小（現在の
「村松小」とは異なる）
だ。敷地は、国道24号沿
いの原研南門前。跡地は現
在、原研のグラウンドとな
り、サッカーやラグビーを
楽しむ人たちの姿がみられ
る。すくわきに小学校をおい
たと打ち明ける。

施設地帯の理想像は施設を
公園、緑地などの地帯が取
り巻く、その周囲には工場
その他の居住用以外の諸施
設が配置される」と述べて
いる。

この客申の約二年前、東
海村内で二つの小学校が閉
校になった。村松小が閉校になったの
は白方小、照沼小に分離し
たためだ。両校は六二年四
月、旧村松小から約二・離

1958年3月の原研周
辺の風景。写真上部の畑
の中に延びる直線道路が
「原研通り」



「原子力村」

第3部 生い立ち

□□□

「原子力施設の周辺約二キロ以内は無人のグリーンベルト地帯とし、六キロ以内は住居以外の事業所地帯とする」と。原子力委員会の専門部会が六四年十一月に打ち出した東海村周辺の土地利用の在り方と人口抑制の答申は、村内の住民に波紋を広がった。

号は「原子力施設に近い地域は人口増加が抑えられ、近い地域に住む人たちの立ち退き、グリーンベルトによる空白地帯は願わぬ。民主主義のこの世の中に、このようにしては出来な。余地すらない」と住民に受け止めた」と話す。村内ではその後も住宅地

学者の理想と現実の壁

幻の都市構想Ⅱ

村の広さは縦横六、七キロ、将来人口が集中しないように、あのような基礎を帯整備が実施されれば、村の大半でこれまでのような暮らしが難しくなるから

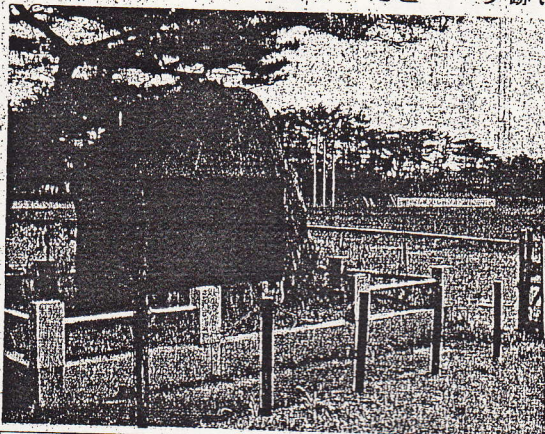
専門部会の答申は、主として営業運転の開始（六六年七月）を目前に控えていた原研立地時（五七年）の三倍の約三万三千人にな

（四）は「当時の原産事務局を直視した草創期の理想が長橋本橋之助さんは東海村を世界に誇る理想的な原子力都市をつくる」と情熱を傾けていましたと語る。た唯一の例外が「原子力損害賠償法」（六一年成立）だ。森さんによれば、この法律は原産や初期の原子力委員会が接する国を粘りに粘りて説得し実現させた。画期的なのは「原子力災害の責任は事業者が一切の責任を負う」と、従来の民法の損

村議会も特別委員会が科技術などに繰り返し、国側も好ましくない。私は学問の真意を探りに動き出した。専門部会の都市計画小

「広報東海」（六五年九月

地帯整備計画について、現東との開きがあった。ま



原子力村

□12□

第3部 生い立ち

昨年九月三十日午後四時すぎ、大勢の報道陣が待ち構える東海村・丹石川コミニティーセンターに、施設前の通称・動燃通りから一台のバスが滑り込んできた。乗っていたのは、お年寄りや幼児連れの若い母親ら十一人。臨界事故のあったJCO東海事業所周辺の住民たちが、原子力災害に伴うわが国史上初の避難者でもあった。

と、同時に、このとき、動燃通りも初めて本来の役割を担った。村を東西に横切り、核燃機構正門前(国道6号)を結ぶ延長約五・二キロの道路。この道路がもとどまり、原子力災害を海村の財政規模は原子力施設

元村職員の須藤佐武さん(左)は役場に入ってしばらくは毎年年末になると、税金の滞納整理のため、地域の民家を一軒一軒お願ひに回った。「職員に支払うべき一ナスの資金が底を突いてしまったため、職員総出の滞納整理で工面せざるをえなかったんです」

設の相次ぐ進出で急速に拡大。村発足十周年となる六年度の村税収入は、原研の誘致前(五年度)の約

画に併せ、小学校区ごとの街づくり構想も策定する。住民自らが独自に地域の未来を描くユニークな試みの民家を一軒一軒お願ひに回った。「職員に支払うべき一ナスの資金が底を突いてしまったため、職員総出の滞納整理で工面せざるをえなかったんです」

面に併せ、小学校区ごとの街づくり構想も策定する。住民自らが独自に地域の未来を描くユニークな試みの民家を一軒一軒お願ひに回った。「職員に支払うべき一ナスの資金が底を突いてしまったため、職員総出の滞納整理で工面せざるをえなかったんです」

画に併せ、小学校区ごとの街づくり構想も策定する。住民自らが独自に地域の未来を描くユニークな試みの民家を一軒一軒お願ひに回った。「職員に支払うべき一ナスの資金が底を突いてしまったため、職員総出の滞納整理で工面せざるをえなかったんです」

交付金で都市基盤充実

「共同体」の歩み

十倍以上に膨れ上がった。しかし、当時、村の台所の実情は火の車だった。収入以上に道路、水道、学校など立ち遅れた社会資本の整備に巨額の出費を迫られたためだ。

な恩恵がもたらされるのは、電源三法交付金制度が創設された七十四年度以降。村内には文化センターや中央公民館、図書館、東海病院、テニスコートなど多彩な公共施設が数多く整備された。

東海村は二〇〇一年度までの交付金、補助金を活用した一トットの村の第四次総合計画で、二カ所のコミュニ

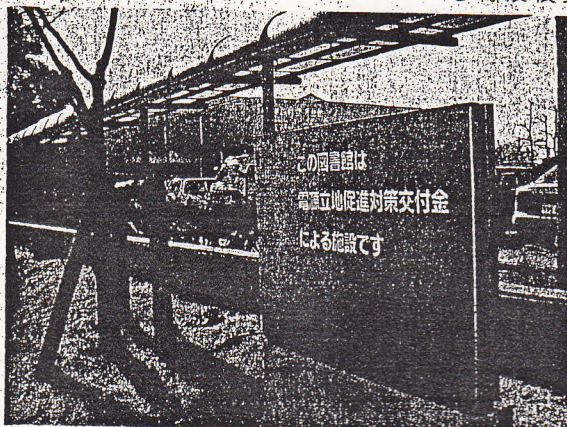
村内には文化センターや中央公民館、図書館、東海病院、テニスコートなど多彩な公共施設が数多く整備された。

東海村は二〇〇一年度までの交付金、補助金を活用した一トットの村の第四次総合計画で、二カ所のコミュニ

村内には文化センターや中央公民館、図書館、東海病院、テニスコートなど多彩な公共施設が数多く整備された。

東海村は二〇〇一年度までの交付金、補助金を活用した一トットの村の第四次総合計画で、二カ所のコミュニ

村内には文化センターや中央公民館、図書館、東海病院、テニスコートなど多彩な公共施設が数多く整備された。



東海村立図書館の入り口前には、図書館が「電源立地対策交付金」で建設されたことを示す看板が掲げられている。東海村船場。

原子力村

第3部 生い立ち

□13□

原研東海研究所にわが国の原子の火がともったのは、一九六〇年、村立東海中学校に真新しい体育館が誕生した。

「体育館は、そのころ屋内運動場と呼ばれていたんで、当時、屋内運動場のあった学校なんて県内にはほとんどなかった。落成は確か水戸市の街中にある水戸二中と同じでした。ウチの村にも都会並みの学校ができたこと誇りました」

と、地元の小中学校で受け入れられた。狙いは、新住民と地元住民の融和。

県が実施した原子力施設社会環境調査（九五年度）によると、本県の原子力事業所の従業員は、全体の九五・一％が事業所の所在地または隣接の市町村に居住している。このうち単身赴任者は全体のわずか二・五％にとどまっている。

一九六〇年代後半、動燃再処理工場の新設計画をめぐって、県議会や旧勝田市議会、日立市議会などが相

互に反対を繰り返した。背景には、原子力施設関係者との日常的なコミュニケーションの受け入れに約十年間に二ヶシーズンと無縁でなってきた住民意識の変化が、い、といわれる。

原子力施設について、原研の誘致決定直後（五六年七月）に実施した意識調査では「危険性を全然感じない」と答えた人はわずか四・〇％だったが、六八年五

家族移住に「広報」効果

「共同体」の歩みⅡ

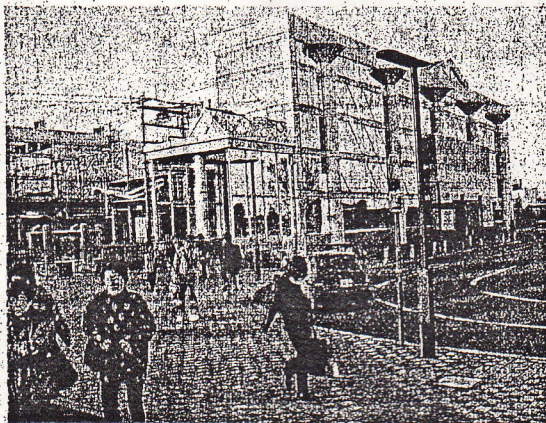
子ども同士の交流や学校行事を通じて、新住民らに家族ぐるみで地元を根付いてもらうという意識があった。

報告書は「比較的東京に本社を置く事業所が多いにもかかわらず、ほとんどの従業員が家族ぐるみで地元で生活をしている」と指摘している。

次いで設置反対を決議し、原子力施設の危険性が初めから本格的な議論になった。しかし、地元の東海村議会だけは最後まで設置反対の姿勢を打ち出さなかつ

た。月実施の村の意識調査では「不安を感じない」とする住民の割合は二九・五％に急増していた。

原子力関係者の地元居住者が、原子力に対する地元の「理解」を広げるのにかなりの効果があったのは確かだ。しかし、それは一方、四歳主婦）風土を形成する役割も担った。



東海村の玄関口・JR東海駅。原子力関係者の多くが家族ぐるみで地元で暮らしている

「原子力村」

第3部 生い立ち

□14□

「私が結婚してこの地（東海村松）にきた一九五四年当時、この辺りは一面に黒松林と美しい砂浜が広がっていた。かやぶき屋根の農家が点在する昔ながらのムラでした」

村の観光名所・村松虚空蔵尊は、「星月旅館」経営の茅根昭義さんが記憶している原研立地前の東海村の風景だ。

原子施設が進出する前の東海村は、農業を中心とする第1次産業就業者が人口の七五・二％（一九五五年）を占める典型的な農村だった。

しかし、その後の原研、

「私が結婚してこの地（東海村松）にきた一九五四年当時、この辺りは一面に黒松林と美しい砂浜が広がっていた。かやぶき屋根の農家が点在する昔ながらのムラでした」

村の観光名所・村松虚空蔵尊は、「星月旅館」経営の茅根昭義さんが記憶している原研立地前の東海村の風景だ。

原子施設が進出する前の東海村は、農業を中心とする第1次産業就業者が人口の七五・二％（一九五五年）を占める典型的な農村だった。

しかし、その後の原研、

「私が結婚してこの地（東海村松）にきた一九五四年当時、この辺りは一面に黒松林と美しい砂浜が広がっていた。かやぶき屋根の農家が点在する昔ながらのムラでした」

村の観光名所・村松虚空蔵尊は、「星月旅館」経営の茅根昭義さんが記憶している原研立地前の東海村の風景だ。

原子施設が進出する前の東海村は、農業を中心とする第1次産業就業者が人口の七五・二％（一九五五年）を占める典型的な農村だった。

しかし、その後の原研、

「私が結婚してこの地（東海村松）にきた一九五四年当時、この辺りは一面に黒松林と美しい砂浜が広がっていた。かやぶき屋根の農家が点在する昔ながらのムラでした」

村の観光名所・村松虚空蔵尊は、「星月旅館」経営の茅根昭義さんが記憶している原研立地前の東海村の風景だ。

原子施設が進出する前の東海村は、農業を中心とする第1次産業就業者が人口の七五・二％（一九五五年）を占める典型的な農村だった。

しかし、その後の原研、

「私が結婚してこの地（東海村松）にきた一九五四年当時、この辺りは一面に黒松林と美しい砂浜が広がっていた。かやぶき屋根の農家が点在する昔ながらのムラでした」

村の観光名所・村松虚空蔵尊は、「星月旅館」経営の茅根昭義さんが記憶している原研立地前の東海村の風景だ。

「共同体」の歩みⅢ

施設に比例し経済繁栄

「原子施設が進出する前の東海村は、農業を中心とする第1次産業就業者が人口の七五・二％（一九五五年）を占める典型的な農村だった。

しかし、その後の原研、

「原子施設が進出する前の東海村は、農業を中心とする第1次産業就業者が人口の七五・二％（一九五五年）を占める典型的な農村だった。

しかし、その後の原研、

「原子施設が進出する前の東海村は、農業を中心とする第1次産業就業者が人口の七五・二％（一九五五年）を占める典型的な農村だった。

しかし、その後の原研、

「原子施設が進出する前の東海村は、農業を中心とする第1次産業就業者が人口の七五・二％（一九五五年）を占める典型的な農村だった。

しかし、その後の原研、

「原子施設が進出する前の東海村は、農業を中心とする第1次産業就業者が人口の七五・二％（一九五五年）を占める典型的な農村だった。

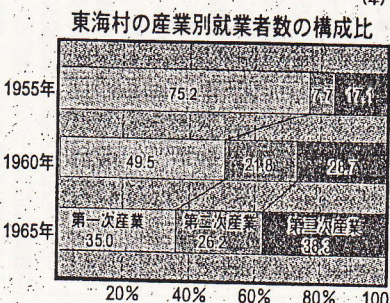
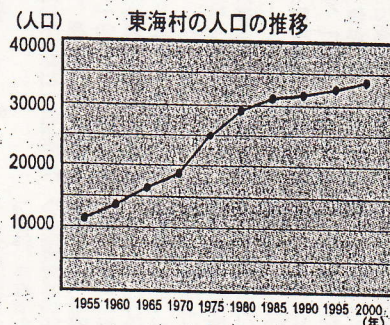
しかし、その後の原研、

「原子施設が進出する前の東海村は、農業を中心とする第1次産業就業者が人口の七五・二％（一九五五年）を占める典型的な農村だった。

しかし、その後の原研、

「原子施設が進出する前の東海村は、農業を中心とする第1次産業就業者が人口の七五・二％（一九五五年）を占める典型的な農村だった。

しかし、その後の原研、



県の「原子力施設社会環境の給与所得の相当分が地元境調査」によると、このうちの一割（九・三％）を原研（報告書）とみられている（一九九二年）。さらに、東海村の住民一人あたりに、同調査によれば、県内の年間平均所得は四百五十万円、県平均の三百四十万円、東海村の年間平均所得は約三百六十万円、六万五千円を大きく上回っている（一九九二年）。

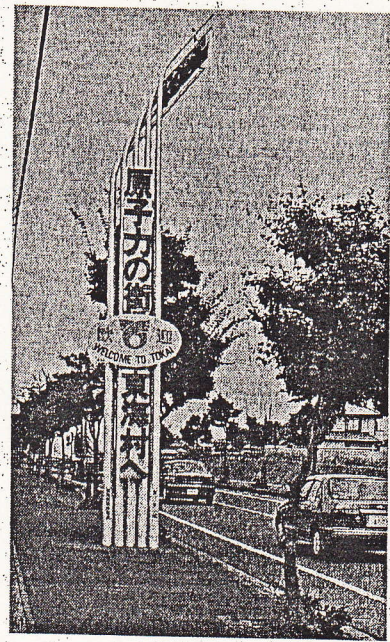
原子力村

第3部 生い立ち

□15□

一九六〇年代後半、動燃村が受け入れてくれないのあての親書を手渡す。
(現核燃機構)の再処理工場の新設計画をめぐって、この日本のどこに立地できるのかと反発しました。県議会や旧勝田市議会、日立市議会、県漁連などが相次いで設置反対を決議し、今年に着工するが、七七年、東海村議会は最後まで反対を打ち出さなかった。「待つた」がかかる。カー

動燃の地域対策担当として、タト大統領(当時)が核兵で当時、この問題の対応にあたった元動燃理事の小林正孝さん(元は「周りは反理・フルトニウムの利用凍結、反対だったが、肝心の結を日本政府に求めてきた東海村の理解がよりどころから、し烈な日米交渉がでた。科技庁の中からは一時「こんな反対が強い海村に現地調査に入った。んじや、東海村はあきらめ、この最中の七月三日、川崎義彦東海村長(当時)は、閣下の格別のご配慮を、アメリカ合衆国大統領が、元談じやない。東海村滞在中の米調査団に大統領



臨界事故の発生まで村入り口の道路沿いに掲げてあった看板。事故後の11月上旬「原子力の街」の文字が撤去された。東海村船場
親書を送ることもなく、だれもが予想しなかった。
九五年十二月起きた福井県敦賀市の動燃「もんじゅ」のナトリウム漏れ事故で、原子力開発に対する国民の不信感は一気に高まった。
これを機にスタートした原子力政策円卓会議には、各地の自治体の首長も出席し、意見を述べた。横浜市で九六年七月二十四日に開かれた第八回会議では、東海村の須藤富夫村長(当時)が招かれた。
この席で、須藤村長は東海村は村内に原子力事業所が十四カ所(当時)あり、日本の原子力開発に大きく貢献しているとのプライドを心ひそかに抱いている。国はやるべき研究開発は実施して、き然とした政策展開をしてほしいと述べた。
同九月十八日の円卓会議には、松浦祥次郎原研副理事長が出席、原発増設をめぐる新潟県柏崎町の住民投票に触れ、自身が十一年間暮らした東海村と比較し、「違和感を感じる。東海村は原子力に誇りをもっている」と述べた。
それから約半年後の九七年三月十一日、動燃再処理工場で大規模な火災爆発事故が起きた。約一カ月後、動燃が科技庁に提出した報告書に虚偽記載があることが明らかにされた。東海村役場に陳謝に訪れた植松副理事長(当時)

国策援護、協調の風土

「共同体」の歩みⅣ

た元動燃副理事長の植松邦彦さん(元は「あのときほど東海村をありがたく思っただけではない。百万の援護を得た思いでした」と振り返る。原子力政策をめぐり、いつはせり合いを演じていて市町村長が米大統領宛に

(第三部おわり)
(報道部・小川敏正)